

玉名高等学校附属中学校 平成28年度学校評価表

<p>1 学校教育目標</p> <p>* 県教育委員会の示す教育指導の重点を踏まえ、三校訓の具現化に努め、徳・体・知の調和のとれた全人教育を目指す。</p> <p>* 本校の積み上げてきた教育方針に基づき、教職員が一体となって、家庭・地域との連携のもと活力ある学校づくりを目指す。 (平成28年度教育実践スローガン)</p> <p>夢実現・可能性への挑戦 ～見えない学力の充実～</p> <p>* 規則正しい生活習慣、良好な食生活、家庭学習の習慣化、読書習慣の定着、思いやりの心の育成。これらは学力の土台をなす「見えない学力」として、「玉高SI」実現に深く関わるものであるとの視点を持ち、その実現に努める。</p>
--

<p>2 本年度の重点目標</p> <p>夢描き、大きく未来を切り拓いていくために創意工夫する人間力あふれる次代のリーダーの育成</p> <p>「徳」の育成：自己肯定感及び他との共生感覚を基盤とした実践力のある豊かな心を育てる。 「体」の育成：「知」や「徳」の土台となる健やかな体を自己管理できる力を育てる。 「知」の育成：中高6年間を通し、自己教育力及び教科間のバランスよい高質の学力を育てる。</p> <p>【努力目標】 附中生としての自覚を持たせ、教育活動を円滑に進めていきながら、中高6年間の教育内容を確立させるとともに、総合的な人間力を身につけさせて高校段階へ送る。 ～各学年・発達段階に応じた、徳体知のバランス及び意欲をもつ生徒を育てる～</p>
--

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策 (主担当分掌)	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	教育課題の共有化	中高合同職員会議や運営委員会における情報の共有	中高合同職員会議や週1回の運営委員会での協議事項等を確実に周知し実践する。	職員会議決定事項や運営委員会の伝達事項を確実に周知徹底する道筋を確立する。(副校長・教務部)	C	決議事項や伝達事項については中学部会や朝の打合せ等で行ったが、情報の共有がまだ不十分である。また、職員の連携も更に図る必要がある。
		中学校職員会議や分掌会議等における決定事項の周知・実践	定期的に中学部会(週1回)を行い、その内容を確実に実践につないでいく。	中学部会等の検討事項を文書等で周知するとともに実践化の場を確保する。(副校長・教務部)	C	行事のある時を除き、週1回の中学部会を実施した。しかし、部会の時間が不足し議論や協議が十分ではなかったところもある。
		職員研修の場や質の確保と実践化	定期的に職員研修(研究テーマ研修及び課題別研修)(月1回程度)の充実を図る。	校内研究の課題を柱に全職員で授業公開等を充実させ取り組む。(校内研究部・教務部)	C	各教科が様々なことに取り組み、研究発表も実施できた。ただ、月1回の課題別研修等の実施にまでは至らなかった。
	危機管理意識の高揚	PDCAサイクル意識を持った学力向上施策の実施	学力の実態を分析精査し、危機意識や展望を持った学力向上対策を行う。	PDCAサイクルの視点に立ち、常に評価と改善意識を持った学力向上対策を講じていく。(進路指導部)	B	学力の分析を更に精緻に行い、弱点克服や学力向上、指導法の改善に更に取り組む必要がある。
		早期発見・早期解決を意識したスピード感のある規範意識の確立	定期的、日常的な教育相談等を通して、危機意識や展望を持ちながら仲間作りの取組充実を図る。	わずかな変化にも気づくよう神経を研ぎ澄ませ、人間関係のもつれや問題行動等を未然に防いでいく。(生徒指導部)	B	教育相談においては、全職員で取り組むことができたが、情報を共有する時間の確保が十分でなかった点に課題が残る。
		危機意識や展望を持った各案件への対応・処理	安全点検や避難訓練等(年間2回以上実施)を通して、危機意識や展望を持ちながら安全管理対策の充実を図る。	常に各事案の最悪の状態を想定しながら、先を見通した取組を行う。(生徒指導部)	B	常に危機感を念頭に置きながら、各学年との連携を密に行った。更に先を見通した判断力を身につける必要がある。

学力向上	授業力の向上	年間指導計画や生徒の実態に応じた適切な教育課程の実施	年間指導計画を精査しながら生徒の実態に応じて適切に教育課程を編成する。	年間指導計画や生徒の実態に応じて、教育課程を円滑に実施する。(教務部)	B	教育課程の円滑な実施に向けて職員の協力を得て円滑に実施できた。 行事の実施場所の確保等の課題も残る。
		積極的な授業公開や授業研究による授業力向上のための対策	授業公開及び研究授業(全員1回以上)、生徒による授業評価(年3回予定)等を通して授業研究の充実を図る。	校内外において積極的に授業公開、授業研究を行い、全職員の授業力向上を図る。(校内研究部)	B	ICTを活用した「未来の学校」創造プロジェクト研究推進校に指定されたこともあり、職員の意識も高まりつつある。公開授業等を通して各教科で研鑽を行っている。 職員全員の1回以上の研究授業の実施等、不十分な点もある。
		中高教科会での研鑽による教科指導力の向上	中高教科会における研究協力を通して授業力の向上を図る。	中高教科会への参加により教科指導における研鑽を深める。(各教科)	B	必要に応じて高校の職員とは連絡を密にできている。
	個に応じた学習指導の工夫改善	宅習時間等の課題把握及び対策による家庭学習の充実	週16時間以上の家庭学習が確保できるような意識の高揚を図る。	各担任と連携し、生徒個々の宅習時間の分析を行い、家庭学習の充実を図る。(教務部)	C	課題等を各教科で出し、家庭学習を促す取組を進めている。 職員数が少ない現状があるが、個に応じた指導を充実させるよう更に工夫が必要である。
		少人数指導や習熟度別指導等の効果的な指導方法の工夫改善	英数等における少人数指導や総合的な学習の時間等におけるIT指導の充実を図る。	学力に応じて少人数指導や習熟度別指導を有効に活用し、学力向上につないでいく。(教務部)	B	数学・英語における少人数教育は適切に実施されている。その効果については十分に検証する必要がある。
	中高一貫教育の推進	6年間を意識した中高一貫教育の充実	中高一貫教育のシステムの構築	6年間の中高一貫教育を意識した教育システムの構築を図る。	昨年度までに確立されたものを精査し、6年間の教育システムのさらなる磨き上げを行う。(進路指導部・教務部)	B
生徒や保護者へ中高一貫教育の趣旨の周知徹底			生徒や保護者へ6年間の教育内容に対する意識啓発を図り、全員が玉名高校へ進学する。	保護者会や各種通信等を活用しながら、6年間のスパンで教育指導を行うことへの理解を進める。(進路指導部・学年部)	B	若干名の他校進学者が見られたが、保護者会、三者面談等で中高一貫教育の意義などへの理解に努め、最小限にとどめることができた。
キャリア教育(進路指導)	進路指導システムの構築	進路指導に生かす各種考査等の在り方の工夫改善	定期考査(年5回)や対外模試等(年2回以上)を有効活用した6年間の進路指導システムの構築を図る。特に対外模試においては、全国に肩を並べられるような学力を目指す。(ベネッセ10月模試偏差値3年生56、2年生55、1年生54)	年間を通じた定期考査や対外模試等を生かし、進路指導および授業改善の有効な資料として活用していく。結果を分析し、教育相談・三者面談・保護者会等で活用する。(進路指導部)	B	10月の学力推移調査は、3年生54.0、2年生53.6、1年生53.5と目標には若干到達することができなかったが、2、3年生は昨年度10月よりもそれぞれ1.6、1.4ポイント上昇した。また、1年生はこれまでの1年生10月の結果の中で最も高い数値になった。
		進路意識の高揚	高校卒業後を見据えた生徒の進路意識の高揚のための啓発施策を図る。	学活や総学、集会等の指導を通して、生徒の進路意識の高揚を図る。(進路指導部・学年部)	B	進路講演会やキャリア教育講演会等で、生徒の進路意識の高揚を図ることができた。

生徒指導	基本的な生活習慣の確立	様々な教育活動を通じた健康的な生活リズムの確立	日常の教科指導や保健指導等を通して健康的な日常生活リズムの確立を図る。	学活や集会、通信等を通して、健康の大切さを理解させ、健康的な生活リズムを確立させる。(生徒指導部・学年部)	B	朝の健康観察等を通して、生徒の健康状態の把握に努めることで、早期発見・早期対応ができた。
		日常指導等を通じた生活習慣の確立	服装・頭髪等の整容面における生活習慣の確立を図る。	日常指導や定期的な整容検査、校門一礼の徹底等を通して、生活習慣を確立させ、発達段階に応じた自立の育成を図る。(生徒指導部・学年部)	B	生徒会や生活委員会を中心に整容検査や校門一礼の徹底等、生徒が主体的に取り組むことができた。
		自転車や公共交通機関の乗り方等における安全感覚やマナーの育成	登下校における自転車の安全な乗り方や公共交通機関でのマナー等の確立を図る。	学校集会や日常指導、通信等を通じて啓発し、交通マナー等を守らせることで未然に事故を防止できるような生徒の育成を目指す。(生徒指導部・学年部)	C	二重ロックの徹底ができなかった。また、自転車通学、電車・バス通学生のマナー等に課題が残った。
生徒会や部活動等の生徒活動の活性化	生徒会や委員会活動等を通じた自治能力の育成	主体的に取り組む生徒会活動の確立を図る。(月1回以上実施)	生徒会や委員会活動を通じて、高校生に頼らなくてよい主体的な自治精神を育成していく。(生徒指導部)	B	各委員会活動を通じた活動はできたが、積極的な自治活動には至らなかった。	
	文武両道に則った効率のよい部活動の推進	文武両道に則った効率のよい、密度の濃い部活動を行う。	活動場所や時間等の制限がある中で、効率よく充実した部活動を進めていく。(生徒指導部・保健環境部)	C	生徒たちに完全下校時間の認識はあるものの、時間ぎりぎりの下校が目立った。	
人権教育の推進	職員研修の充実による人権意識の高揚	人権感覚を磨く質の高い職員研修の実施	教職員の人権感覚を磨くための職員研修の充実を図る。(中高合同及び独自実施)	職員研修等を通じて、職員同士で人権感覚を磨いていく。また、年に1回以上研修会に参加する。(人権教育部)	C	熊本地震の影響もあり、当初予定していた全職員の研修参加を果たすことができなかった。また、職員同士で日頃の取組を振り返る機会が少なかった。
	指導内容や方法の工夫改善	年間指導計画の精査及び生徒の実態に応じた人権学習の実施	年間指導計画を精査し、それに基づいた人権学習の質的充実を図る。	年間指導計画を精査しながら、実態に即した指導内容を考え人権学習の充実を図る。(人権教育部)	B	各学年、年間指導計画に基づき、学習を進めることができた。
	「命を大切にすする心」を育む指導の充実	「命を大切にすする心」を育む指導計画を確立させ、行動化するための方策の策定	指導計画を構築・精査し、それに基づいた「命の教育」の質的充実を図る。日常的にそれに基づく教育実践ができるよう、職員へ徹底する。	指導計画を精査しながら、実態に即した指導内容を考え、命の教育の充実を図り、生徒の行動化につなぐ。(人権教育部)	B	指導計画を見直し各教科で命を大切にすする学習を実施することができた。また、年2回の人権集会を実施し、日頃の取組を深めることができた。
いじめ防止	いじめ根絶と不登校ゼロの取組	日常指導等を通じた周知、いじめ根絶のための意識高揚と不登校生徒や保健室登校生徒への支援	全校生徒が安心して生活できる学校づくりを目指す。いじめや不登校生徒を出さないための体制作りや日常的な指導の在り方の工夫を図る。(いじめゼロを目指す)	日常指導や集会、生徒会や委員会活動、月1回の「心のアンケート」、教育相談等を通して、いじめゼロ等の取組を進めていく。「心のきずなを深める月間」の取組で生徒が書いた人権作文や人権標語の紹介を行う。「いじめゼロ」宣言文の確認をし、全校生徒で読み上げる。(生徒指導部・人権教育部・生徒会)	B	月1回の「心のアンケート」を行うことで、生徒たちの思いを把握し、速やかに対応することで相談しやすい雰囲気づくりに努めた。人権作文や人権標語は全校生徒で取り組み、人権集会や校内掲示で紹介することにより校内の人権意識を高めることができた。生徒会執行部の働きかけにより、月1回の生徒朝会で「いじめゼロ」宣言文の唱和を行うことができた。

特別支援教育	一人ひとりに応じた特別支援体制の確立	様々な情報をもとにした特別な支援を要する生徒の把握及び適切な支援	特別支援を要する生徒の把握と個別の教育支援計画等の策定を図る。	小学校や各種検査等の情報をはじめ校内での連絡を密にし、特別な支援を要する生徒を把握、支援計画等を策定するとともに、適切な支援を行う。(人権教育部)	B	中学部会や生徒支援委員会、人権教育推進委員会で小まめに情報交換を行い、生徒の把握に努めることができた。
		職員研修をもとにした特別な支援の在り方についての研鑽	教職員の特別支援教育に関する研修の充実を図る。(年1回以上)	中高合同の研修や校外研修を通して、個に応じた特別な支援の在り方の研鑽を深める。(人権教育部)	B	講師による研修を通して、具体的な特別支援教育の方法について理解を深めることができた。
環境教育	学校版環境ISOの視点にたった環境教育の充実	研修を通じた教職員の環境保全意識の高揚	生徒の環境保全意識を高めるための指導方法の工夫改善を図る。	中高合同による研修を深め、まずは教職員の環境保全意識を醸成する。(保健環境部)	B	裏紙利用や消灯など取り組めたと思う。今後も資源の有効活用を心がけていく。
		生徒会による環境ISO実践の充実	中高連携による学校版環境ISOの取組の推進を図る。	中高の生徒会活動等を通して生徒の意識を高め、学校版環境ISOの取組を推進する。(保健環境部)	B	生徒会活動は活発で、生徒は主体的に取り組んでいる。更に活動を活発にしたい。
安全管理	健康で安全な学校生活のための意識高揚と校内体制の確立	日常指導や学活等を通じた生徒の健康・安全意識の高揚	食育や性教育の充実をはじめ健康診断等の活用による生徒の健康増進のための取組の充実を図る。	日常指導及び学活等を通して健康で安全な生活を意識した生徒の育成を図る。(保健環境部)	B	フッ化物洗口等日常的な指導はできたが、早めの感染症予防対策が必要であった。
		防災対策の確実な理解と避難訓練等による生徒の危機管理意識の高揚	災害や不審者等の防災対策の確立と生徒の危機管理意識の高揚を図る。	防災対策を確認するとともに避難訓練等により生徒の危機管理意識を高める。(保健環境部)	B	避難訓練等は、事前指導も含め生徒たちは真剣に取り組むことができた。今後も継続的に指導していきたい。
情報教育	情報の正しい活用と意識の高揚	生徒の情報管理や情報モラルに関する意識の高揚	情報の正しい活用のためのノウハウの習得及び情報モラル意識の育成を図る。	各種の研修を踏まえ、生徒の実態に応じて情報管理や情報モラルに関する意識を高める。また、保護者会等で保護者向けの講演会を実施し、保護者の意識の高揚と情報の提供を図る。(情報管理部)	B	タブレットを使った情報モラル教育を各クラスで道徳の時間に実施できた。保護者への啓発には課題が残る。
読書指導	読書による学力と豊かな心の育成	よりよい読書活動を通じた学力と豊かな心の育成	学校図書館や良書推薦を通して読書を推進していく。学校図書館利用に関しては年間一人当たり50冊以上を目標とする。	毎月4日を「玉附読書の日」と定め、良書に親しむことを意識させながら、学力と豊かな心の育成につなげる。また、読書の歩み(読書カード)により生徒の読書の状況を確認する。(図書部)	C	読書に親しむ姿勢は全生徒身につけることができた。目標の50冊には届かない生徒がまだ多くいることが課題である。
保護者・地域との連携	保護者や育友会組織との連携	各種便りや授業参観等を通じた保護者との連携と協力体制の確立	学級便り(週1回程度)や授業参観(年3回)等の情報提供による保護者との連携協力の充実を図る。	各種便りや授業参観等を通して、確実に保護者等へ情報を提供していくことで、連携協力体制を固めていく。(副校長・学年部)	B	各学期の授業参観や毎週の学級通信等を通して情報提供がなされている。
		中高の職員と育友会役員とが連携し合う円滑な育友会組織の運営	中高連携による育友会組織の確立と取組の充実を図る。	中高連携の育友会組織を職員と育友会役員との連携のもとで充実させる。(副校長・総務部)	C	中学校育友会の連携は図れているが、中高連携という意味での連携はまだ不十分である。
	地域への貢献を意識した取組の確立	様々な教育活動の中で、地域社会に役立つような奉仕活動等の検討と実施 教職員各自の地域における奉仕活動の奨励と、行政や近隣学校等との連携	生徒の学習活動における地域への奉仕活動等の取組と充実を図る。(年1回以上) 教職員の地域住民としての奉仕活動を促すとともに行政や近隣学校等との連携を図る。	総合的な学習の時間や学活、学校行事等を通じて、地域社会に貢献する活動を取り込んでいく。(学年部) 教職員自身が地域の一員として、地域活動に参加したり、行政や近隣学校等との連携協力について、適切な取組を行っていく。(全職員)	B C	1年総学では地域清掃ボランティア活動に取り組み、地域に貢献する意識を高めることができた。 土曜日授業や休日の部活動指導等で地域の活動には参加できていない。長期休業等を利用して地域との連携を深めていきたい。

4 学校関係者評価

自己評価（教職員）及び外部アンケート（生徒・保護者）を受け、平成29年2月16日実施の学校関係者評価委員会において、意見や助言をいただいた。全体として、本校への期待が大きく、高い評価を得た。主な意見等については以下のとおりである。

- ・分析結果を学校運営に生かしていこうという視点が学べてよかった。
- ・本当の話を率直に語り合える場づくりに敬服する。
- ・丁寧な分析を行っていただきありがたいと思う。先生方の日々の頑張りが成果として表れつつあると思う。
- ・とても興味がある行事が思ったよりたくさんある。
- ・先生方が厳しく取り組んでおられることを評価から感じた。
- ・中学の段階から大学の体験講義を受けることは、生徒自身が将来を考えるよい機会である。
- ・進学校の特色を生かしながら、子供の全人格教育により一層努められることを願う。
- ・今後とも小中校長会と連携を取ってほしい。
- ・反省すべきは真剣に検討し、正直な数字に表れる部分の奥にあるものに立ち向かってほしい。
- ・附属中の取組と全日制での取組の連携がどうなのかと思う。中高一貫教育校での特色を生かしてほしい。
- ・中高一貫教育校ならではの取組をもっと全面に押し出していくことが、附属中への入学希望者数を増やしていくことになると思う。

5 総合評価

今年度は高校3年生まで中進生（附属中学校から玉名高校に進学する生徒）が揃い、完成年度を迎えた。検証の年と位置づけ、更なる授業の充実を第一に考え、規律ある学校経営が求められる一年であった。

平成28年度教育実践スローガンとして～夢実現・可能性への挑戦～を掲げ、中1生の九州大学訪問や中2生の熊本大学研修、中3生の英語合宿研修等、本校独自の教育活動を実践した。また、英語検定や漢字検定、日本語検定等にも積極的に取り組むことができた。さらに、学習においても中高一貫教育校対象の「学力推移調査（ベネッセ）」を指標として、中3生には偏差値56と高い目標を立て取り組んだ。また、2回の「共通テスト」を受検させ、5教科計で175点を目標に取り組むことで、中3生としての意識の向上と中弛み防止に努めた。結果は、数値目標までもう少しのところであった。中2生では、入学以降ずっと上向きの状況が続いていたが、最後は少し数値を下げてしまった（54.7→53.6）。また、成績の下位層の底上げと上位層の育成という課題が残る結果であった。中1生は上向きの状況であり（52.0→53.5）、過去5年間で一番良い結果を収めている。特に数学の躍進は顕著である（50.8→55.1）。学年、各教科で結果分析及び今後の取組について協議し、今後の方向性について共通理解を図った。

評価としては全体的に厳しい評価となっている。情報共有が不足していたり、職員の連携がうまく図れていないという反省もあるが、一方で職員の「意識が高いこと」と「もっとやれる」という意識の表れという側面もある。本校生は素晴らしい能力を秘めているが、今後更に創意工夫を凝らした教育活動を展開する必要がある。

6 次年度への課題・改善方策

(1) 学力の向上

中3生は、学力推移調査偏差値56、共通テスト（2回）175点以上という数値目標を立て取り組んだが、すべての目標をクリアすることはできなかった。中1生、中2生も数値目標には若干到達できなかったが、上向きの状況である。

○改善方策

- ・本年度は、生徒並びに保護者の進路意識の向上を図るため、学力推移調査や定期考査の結果を学年や各教科で分析した。課題や今後の取り組みについて、生徒には学年集会、保護者には授業参観時の学年保護者会で説明を行った。説明の方法・内容については、今後も職員間で協議・検討し、継続していきたい。また、生徒並びに保護者向けの進路講演会等を計画的に実施することで、進路意識の高揚に努めたい。
- ・成績不振者については、長期休業等に補講を行うことで、学習方法や予習・復習の大切さ等、基本的なことができているかを確認し、学習の大切さを十分に理解させたい。

(2) 不登校生徒（30日以上欠席）の増加

55の小学校からの在籍生徒がいる中、成績不振や悩みを抱えた生徒と関わる時間の確保等、課題が多い。

○改善方策

- ・「仲間づくり」を基礎に据えた教育活動を進める。生徒同士の教え合い学び合いを大切に、生徒会活動等、生徒が主体的な取り組みができるよう支援していきたい。
- ・SC（スクールカウンセラー）や心療内科、関係機関等と連携を図りながら計画的に対処していきたい。
- ・中学部会等で情報共有を行っているが、より一層早期発見・初期対応を心がけたい。

(3) 「豊かな心」の育成

現状では、毎月定例のいじめ実態把握調査「月例・心のアンケート」及び、学期に1度の定期教育相談、年2回の人権集会等により、生徒たちの人間関係等を細かく丁寧に把握し、スピード感を持って対応しているが、いじめアンケートで複数の生徒が「いじめを受けたことがある」と回答するなど課題もある。

○改善方策

- ・全職員が「いじめは許すことのできないことである」という共通認識のもと、「いじめ等はいつでもどこでも誰にでも起こりうる」ものと考え、常に危機感を持って取り組んでいく必要がある。

(4) 中高一貫教育校としての（6年間を見据えた）教育の在り方

- ・中高一貫教育校として、本校の進むべき方向を示した「玉高SI」による教育実践を組織として取り組み、校務分掌や学年等、定期的（学期毎）に検証する。反省すべき点や改善が必要な点については、速やかに改善が図れるよう全職員で協議・検討し、改善を図りたい。